

畑わさび栽培地で発生した葉柄の黒変被害とその対策

1 はじめに

遠野地方の畑わさび栽培地において、生産物の商品価値を低下させる葉柄の黒変被害が発生し、既知の害虫「ナトビハムシ」(以下「ナトビ」という。)の食害が疑われました。

そこで、遠野農林振興センターでは、これまで当地で被害発生が確認されていない「ワサビルリイロサルゾウムシ」も警戒しながら、加害種の同定とその被害程度の把握を試み、その防除について指導を行ったので報告します。



葉柄の黒変被害(左は健全部位)

2 加害種は?

加害種を特定するため、6月に被害葉柄を採取し繊維方向に割り裂き、葉柄内に寄生する食害昆虫を探索したところ、体長約5mmの幼虫が確認され、さらに8月には、葉上に寄生していたナトビの成虫が多数確認されました。

そこで、県病害虫防除所に採取された幼虫の同定を依頼したところ、「ナトビ」と判明しました。

また、幼虫、成虫ともにワサビルリイロサル

ゾウムシは確認されなかったため、葉柄黒変被害はナトビによるものと判断されました。



寄生していたナトビの幼虫(右上は成虫)

3 被害程度の把握

被害程度の把握を行うため、栽培地内の区画ごとに被害発生率や被害程度を確認したところ、被害は栽培地内の区画や個体サイズにより差がありました。激害区では被害率は100%に達し、収穫前の大型の株は比較的被害が大きい傾向が見られました。

4 防除対策

当地方では、予防的措置としてトレボン粒剤の散布が行われていますが、連作によりナトビの生息密度が高まったものと推測されます。

そこで、被害が多発した場合、トレボン粒剤に加え、スタークル顆粒水溶剤の散布も行うよう指導しました。

引き続き、畑わさび栽培の生産拡大に向けて、栽培技術の普及定着を進めていきます。